



第201回くらしの植物苑観察会 2015年12月19日(土)

-サザンカの系統保存-

箱田 直紀(恵泉女学園大学名誉教授、日本ツバキ協会会長)

サザンカ園芸種のもとになった野生サザンカは九州や四国から沖縄にかけて分布し、6~7弁の白花ですが、庭に植えられている園芸種には桃色や紅花があり、最近では八重咲きの華やかなものも増えてきました。このような花の色変わりや花形の変化した株(今日でいう園芸品種)が現れたのは江戸時代のはじめ頃からです。初期の園芸化は、自然の中に突然変異や種間交雑などで生じた変わり花を見つけた人によって、庭や人家の周辺に株が持ち込まれ、時には増殖されたり、他人に譲渡されて広まることから始まったと考えられています。自然の中の変異株は、人に気付かれなければ、その個体が枯死すれば消滅してゆく運命のわけですが、園芸品種は、人が見つけ増殖することによって残ってきた貴重な遺伝資源であると同時に、その継承過程に数多くの先人が関わってきた文化遺産でもあります。

サザンカは西南日本の原産ですから、自生地周辺に生じた変異が京や江戸などに持ち込まれ、同時に各地に様々な品種を発達させてきた経過を追いながら品種保存の問題点を考えてみましょう。

1. 江戸サザンカの発達と継承

サザンカの記録が現われる1600年代初頭から1700年代中頃にかけて品種の数が一気に増加しましたが、同時に、当時の植木産地、染井の伊藤伊兵衛をはじめとする園芸家によって優雅な品種名がつけられて市販もされたようです。これらの品種は、江戸期後半に再び品種数を増やし、明治維新後は新たな植木産地である埼玉県の新安行に受け継がれました。安行で多くの江戸ツバキとサザンカを引き継いだ椿花園の皆川治助は、第二次大戦中の為政者からの伐採命令にも抵抗して保存木を守り、それが戦後から今日の園芸ツバキやサザンカの基本となっていることは有名な話ですが、この抵抗と系統保存の背景には、当時の園芸雑誌「実際園芸」の主幹であった石井勇義や小林憲雄氏など多くの人達の支援や応援があったことも忘れてはいけないと思います。

安行に残された江戸ツバキの多くは、戦後増殖されて全国に広まり、1950年代に始まるツバキブームの立役者となっています。しかし、サザンカは120品種を超えるといわれながら、その後も安行や周辺の数カ所に保存されるだけで、一向に苗が出まわりませんでした。全品種ではなくても、後世へむけての品種や系統保存のためには株が増殖されて広く普及することが最良なのですが、江戸サザンカに関してはいまだに普及段階に至っていないというのが現状です。

2. 京都や関西のサザンカ

秋の京都の観光案内は紅葉一色で、同じ頃に開花するサザンカはほとんど表に出てきません。京都のサザンカの銘木といえば詩仙堂の樹齢400年以上といわれた白花の大サザンカと大徳寺塔頭・竜源院の紅花ハルサザンカ・楊貴妃でしたが、詩仙堂の大サザンカは1996年の神戸淡路大震災のときに倒れて枯死、竜源院の楊貴妃はその10年ほど前に立枯れをして山門の内側に挿木で殖やした2世が育っています。この2本の古木が枯死した京都や奈良などに銘木といえる

ほどのサザンカは見つかりませんが、京都などの寺院や民家の庭にはサザンカはどこにでも植えられています。

嵯峨野をはじめとする各所の寺院等の植え込みの中でひっそりと咲くサザンカの姿がむしろ京都らしいのかもしれない。

3. 肥後サザンカの発達と継承

熊本には肥後六花のひとつとして 40 品種に及ぶ肥後サザンカが継承されています。幕末期に京都方面から持ち込まれた園芸品種をもとに、明治以降に選抜されたもので、山崎、杉山、斎藤家など旧藩士家を中心に伝えられ、秋には毎年鉢植えを中心とした肥後サザンカ展が開催されています。熊本城址内にも肥後サザンカ園が設けられ品種の保存がはかられています。このように品種保存の伝統まで継承してきた肥後さざんか協会でも近年は会員数が減少してきて、再構築が急務であるとの声もあがっています。肥後サザンカを含めた肥後六花は、巷間では門外不出のようにいわれてきましたが、地元では必ずしもそのようには伝えられていないようで、かつては市内でも増殖販売され、久留米市周辺から市販されたものなどがかなり全国的に栽培されています。

4. 久留米のサザンカ

久留米市街地の東方・草野地区や隣接の田主丸一帯は江戸時代からの植木産地ですが、1950年代後半から国の助成を受けて、ミスト繁殖による苗の大量生産体系が確立されました。とくにツツジ、ツバキ、サザンカ等の小苗が安価で生産されるようになり、全国の植木産地への苗の供給基地に生長しました。しかし、1960年代をピークとする緑化ブームの沈静化と、後継者不足から経営規模の縮小に迫られて苦悩しているのが現状です。

5. その他の地域と全国的な流れ

上記以外にも、愛知県の稲沢市や隣接の旧祖父江町は大都市名古屋に近い古くからの植木産地で、ツバキとともに多くのサザンカ品種が残されています。南方の三河湾を囲む各地から浜松市、静岡市にかけてのいわゆる東海地方は冬の気候も温暖で、サザンカが冬を通じて開花を続けるため多くの古木が人家や寺院などにみられます。

しかし、多数のツバキ品種が植えられたツバキ園は、各地にあります。サザンカ品種が多く植えられた植物園や公園は、ほとんどありません。そのため、近年は国内ばかりでなく海外からもサザンカの品種を見たい、あるいは苗を入手したという希望が増えてきました。とくに海外で意識されているのは、戸外で花の少ない時期の花ということからですが、そのためにも、日本国内でもこの貴重な遺伝資源と文化遺産を保存・継承する具体策を考える必要に迫られています。



図1 江戸初期からの「三段花」



図2 江戸の名花「東雲」

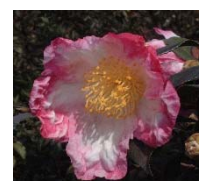


図3 肥後サザンカ随一の「大錦」

.....

次回予告 第202回くらしの植物苑観察会 2015年1月23日(土)

「山菜利用の変化」柴崎 茂光(当館民俗研究系・准教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要